

# 鹿児島県鹿児島市方言における疑問文イントネーション

- 若年層に着目して -

九州大学文学部  
言語学・応用言語学専門分野  
2021 年（令和 3 年）入学  
原口悠介  
2025 年（令和 7 年）1 月提出

## 要旨

本論文の目的は、鹿児島県の鹿児島市方言を対象に、若年層の間で日常的に選択されている疑問文イントネーションについて記述することである。鹿児島市方言は、語末から数えて2つ目の音節が高いA型と、語末音節を高く発音するB型の二つのアクセント型が見られる（窪薙 2021）。前原（2021）の調査により、A型動詞では、真偽疑問文か疑問詞疑問文にかかわらず疑問のイントネーションは上昇、B型動詞では下降で産出されると判明した。前原（2021）の行った調査はあくまで鹿児島市方言の疑問文イントネーションとして容認可能なものは何かという観点だった。しかし、近年鹿児島市の若年層でも標準語化・共通語化が進んでいる。そのため、鹿児島市方言としては容認可能でも、話者が普段の会話では選択しないイントネーションがあるのではないかと考え、自然発話時のイントネーションを調査した。その結果、鹿児島市方言として容認可能なイントネーションと若年層が自然発話時に選択するイントネーションには乖離があることが判明した。

## 目次

1.はじめに.....	1
1.1.本研究の対象方言.....	1
1.2.二型アクセント.....	1
2.先行研究.....	2
2.1.疑問文イントネーション.....	2
2.2.文末詞.....	2
2.3.昇降調.....	4
2.4. 2000 年代以降の疑問文イントネーション研究.....	4
2.5.先行研究の問題点.....	6
3.調査.....	8
3.1.調査概要.....	8
3.2.調査結果.....	13
3.3.自由記述.....	19
4.考察.....	20
5.結論と今後の課題.....	21

# 1.はじめに

本研究の目的は、鹿児島県鹿児島市方言の、疑問文イントネーションを記述することである。従来、鹿児島市方言の疑問文イントネーションは述語動詞のアクセント型によって、また疑問文の種別（真偽 vs. 疑問詞）によって、異なった音調をとることが指摘されてきた。さらに、ここに世代差も関係していることが明らかにされてきている。本論文では、これらすべての観点に着目し、特に若年層の間で日常的に使用されているイントネーションがどういったものか、先行研究との違いを含めて記述する。その結果、自然発話時に選択される疑問文イントネーションと、鹿児島方言として容認可能と認識されるイントネーションには乖離があることが明らかとなった。

## 1.1.本研究の対象方言

九州の南端、鹿児島県本土西部の薩摩半島に位置する鹿児島市を中心に話されている方言を鹿児島方言または鹿児島市方言と呼ぶ。窪菌（2021）は、鹿児島県本土西部の薩摩半島でも枕崎や頬杖など一部の地域は独自のアクセント体系を有しているため、例外としている。鹿児島市方言は「九州西南部二型アクセント体系」に分類され、長崎方言や甑島方言が同じグループに属する。

## 1.2.二型アクセント

この方言では、語の長さや品詞によらず、アクセントは A 型と B 型の 2 種類に分類される（平山 1997）。なお、以下では、〔を音調の上がり目、〕を音調の下がり目として表記する。

- (1) a. A 型：文節末から数えて 2 音節目が高く最終音節が下がる  
サ [カ] ナ、サカ [ナ] ガ、サカナ [カ] ラ、サカナカ [ラ] モ (魚)
- b. B 型：最終音節が高く上がる  
イノ [チ、イノチ] [ガ、イノチカ] [ラ、イノチカラ] [モ (命)]  
[窪菌 (2021:16)]

上で示したように、文節がどれだけ長くなってもこの 2 つの型しか現れない。つまり、文節を単位としてアクセントが付与される。この文節性（上野 2012）は西南部九州の N 型アクセントの特質の 1 つである。

## 2.先行研究

### 2.1.疑問文イントネーション

現代日本共通語や英語において、一般的に平叙文が非上昇のイントネーションであるのに対し、疑問文ではイントネーションが上昇する傾向が見られると言われている（窪薙 2021）。しかし、他の方言ではこの特徴は必ずしも当てはまるものではない。窪薙（2021）によると、共通語（=東京方言）や近畿方言では疑問文で上昇するものの、名古屋方言では疑問詞が文末に来る場合に文末下降で発話される。平山（1997）や窪薙（2021）が指摘する通り、鹿児島市方言でも疑問文が一般に文末下降のイントネーションをとる。

- (2) a. [ア]ヤ ヤマダ[サ]ン ナ  
b. [ア]ヤ ヤマダ[サ]ン カ  
c. [ア]ヤ ヤマダ[サ]ン ャ] [平山 (1997:13)]

平山（1997）は文末詞「ナ」「カ」「ヤ」を付与した場合のイントネーションについて記述しているが、ナ・カ・ヤが付与されていない場合に音調がどうなるかについての記述を行っていない。それだけでなく、アクセント型や、真偽疑問文や疑問詞疑問文の違いがイントネーションに影響を与えるか否かについても言及していない。

### 2.2.文末詞

木部（2000）は、鹿児島方言の文末詞を大きく以下の4種類に分類できるとした。

- (3) a. 判断の伝達：ド・ガ・カイ  
b. 内容を聞き手へ伝える：オ・ヨ  
c. 聞き手へ訴える：ナー・ネー  
d. 質問を表す：ナ・カ・ヤ・ケ

後藤（1994）は、上記の文末詞を含め、鹿児島市方言には「カ」「ナ」「ネ」「ヤ」「ケ」「モンカ」「ガ」「ド」「デ」「ヨ」「ナ」「ネ」「ヤ」「オ」「ダイ」などがあるとしている。後藤（1994）では、「ナ」「カ」「ヤ」「ケ」に加え、「ネ」「カイ」が疑問を表す文末詞として紹介されているが、この二つの文末詞は木部（2000）では挙げられていない。

平山（1997）は、鹿児島方言には疑問の文末詞「ナ」「カ」「ヤ」「ケ」が存在し、

「ナ」が最も敬意が高く、順に敬意が下がるとしている。木部（2000）によると、「カ」「ヤ」「ケ」に丁寧度の差はなく、ヤは完全に男性語になっている。加えて、「ケ」は高年層では「格下げの感」があつてあまり使われないが、若年層では男女ともよく使われる。疑問文において、文末詞ナ・カ・ヤの場合は下降調で、ケをつけた場合は上昇音調で発音されるのが普通であり、ナ・カ・ヤが下降調をとるのは、これらの文末詞が疑問詞の役割を果たしているからだと推察する。木部・久見木（1993）でも同様の内容に触れており、鹿児島市方言では疑問文の指標が語形式として必ず現れるためにイントネーションは感情的意味を表し、それが東京方言では語形式として確立していないためにイントネーションが平叙文か質問文かといった論理的内容を表すのだとしている。この法則にしたがうのであればケも他の疑問文末詞と同様に下降をとってもよいはずだが、上昇をとる理由として、木部（2000）は、ケの音調がイントネーションではなくアクセントである可能性を指摘する。ケは元々カイであり、カイがA型だったため、ケも上昇するのではないかと考察をしている。以下の例文中の疑問詞「ナイ」（何）はB型である（窪薙 2021）

- (4) a. [ア]ヤ [ナイ] ナ (あれは何ですか)  
b. [ア]ヤ [ナイ] カ (あれは何か)  
c. [ア]ヤ [ナイ] ャ (あれは何か)  
d. [ア]ヤ [ナイ] [ケ (あれは何か)] [木部 (2000:108)]
- (5) a. [ア]ヤ サクラ[ジ]マ ナ (あれは桜島ですか)  
b. [ア]ヤ サクラ[ジ]マ カ (あれは桜島か)  
c. [ア]ヤ サクラ[ジ]マ ャ (あれは桜島か)  
d. [ア]ヤ サ克拉[ジ]マ [ケ (あれは桜島か)] [木部 (2000:108)]

その一方で、ナ・カ・ヤが上昇調で現れることもある。それは、不審の度合いが強いとき、または回答を求める度合いが強い時である。

- (6) a.[ア]ヤ [ナイ] [カ (あれは何か)]  
b. [ア]ヤ サクラ[ジ]マ [カ (あれは桜島か)] [木部 (2000:109)]

上記のような例では、「あれが本当に桜島か」「あれが何か、どうしても早く教えてくれ」といった意味になる。

## 2.3.昇降調

近年、若年層では共通語化が進み、木部・久見木（1993）によると、老年層が使う文末詞のほとんどが使われなくなっている。疑問の文末詞に関しても変化が表れており、ナは全く使われず、ヤは男性がわずかに使う程度、カも名詞や動詞に直接接続する用法は使用されない。その中で、ケだけが男女問わず広く使われているという。ケは音調面で新しい変化を見せ、最初に上昇し、その後下降する音調を生み出している。木部（2000）はこの音調を「昇降調」と呼ぶ。

- (7) a. [コ] レ [ア] メ ナ [ノ] 一 (これ飴なの?)  
b. ナ [ニ] [イッ] テン [ノ] 一 (何言っているの?)  
[木部 (2000:111)]

加えて(8)のように、この昇降調のイントネーションは文末詞のない文にまで広がっていることから、木部は上昇、下降に次ぐ第3のイントネーションとして認めるべきだとしている。

- (8) a. [ア] レ [アメ] 一 (あれ飴?)  
b. シン [ブン] ヨ [ム] 一 (新聞読む?) [木部 (2000:111)]

## 2.4.2000年代以降の疑問文イントネーション研究

昇降調の広がりについて、太田（2002）は、録音された音声を聞かせて被験者に判断を求める形式の音声聴取実験によって検証した。鹿児島市内の2大学から学生196名のうち県外出身者及び離島出身者を除く117名のデータを使用した。太田(2002)が音声聴取実験によって検証した上昇調と昇降調のA/B型真偽疑問文、A/B型疑問詞疑問文における選択率平均値のデータをもとに前原（2021）が以下の表を作成した。

表1:若年層の鹿児島市方言における疑問文音調についての調査結果（太田のデータをもとに前原作成）

	文末語のアクセント	イントネーション	実現ピッチ形
真偽疑問文	A型	上昇	上昇
	B型	下降	昇降
疑問詞疑問文	A型	上昇	上昇
	B型	不明	上昇

この結果から、太田（2002）は以下の結論を出した。

- (9) a. 真偽疑問文：述語（動詞）のアクセントにより、文末に現れる音調が決まる傾向がある。すなわち、A型述語の場合は上昇音調を、B型述語の場合は昇降音調を取ることが多い。  
b. 疑問詞疑問文：述語（動詞）のアクセントと関係なく、上昇音調を取る傾向にある。その際、述語部分のアクセントは目立たないことが多い

[太田(2002:38)]

A型動詞の場合は真偽疑問文、疑問詞疑問文が上昇調ではなく昇降調をとると答えた被験者はともに10%前後にとどまり、木部（2000）の主張した昇降調の広がりはA型文には見られないことが判明した。

太田の調査結果は2000年代初期の鹿児島市方言の動態を示している。そこから約20年経過している現在の鹿児島市方言について、太田の調査結果を再検証したのが前原（2021）である。前原（2021）によると、現在の若年層は、動詞のアクセント型（A/B）に関わらず、平叙と疑問はイントネーションパターンによって区別するということが判明した。この区別はアクセント型によって異なり、A型動詞は、真偽疑問文/疑問詞疑問文にかかわらずイントネーションは上昇で産出され、平叙と疑問の区別がされる。以下は前原（2021）の調査で産出されたA型のイントネーションである。

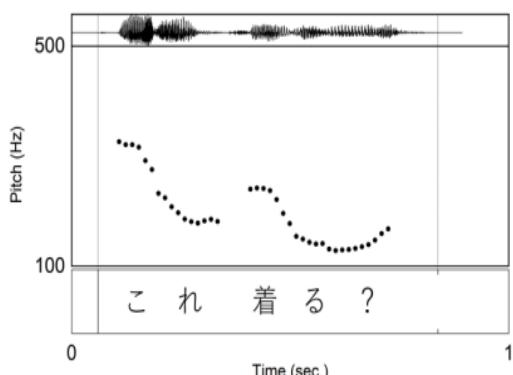


図1: A型真偽疑問文「これ着る？」

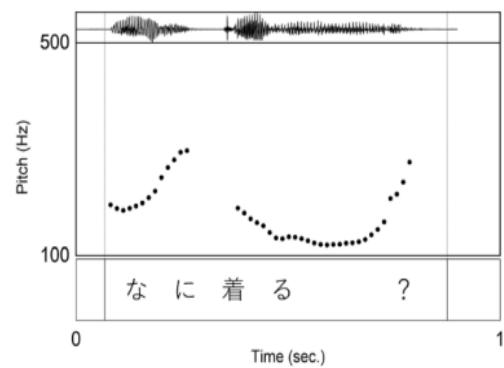


図2:A型疑問詞疑問文「なに着る？」

一方、B型動詞では真偽疑問文/疑問詞疑問文は共に疑問のイントネーションは下降で産出され、平叙と疑問の区別がされる。以下は前原（2021）の調査で産出されたB型のイントネーションである。

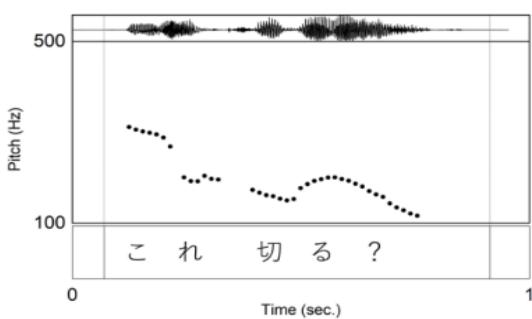


図3:B型真偽疑問文「これ切る？」

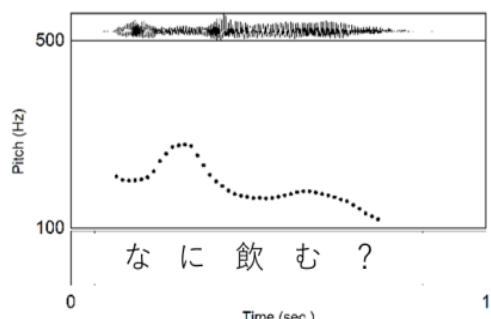


図4:B型疑問詞疑問文「なに飲む？」

また、疑問の文末詞を付与しても動詞のアクセント型には影響しない。太田（2002）と前原（2021）の結果を以下にまとめると。

表2:太田（2002）と前原（2021）の調査結果比較

	A型動詞		B型動詞	
	太田	前原	太田	前原
真偽疑問文	上昇	上昇	下降（昇降）	下降（昇降）
疑問詞疑問文	上昇	上昇	上昇	下降（昇降）

両者の相違点はB型動詞の疑問詞疑問文である。太田の研究では上昇イントネーションが観察されるのに対し前原の研究では昇降調になっている。この点については、両者の研究の間に起こった世代による変化と捉えることも出来るが、はっきりとした理由は分かっていない。

## 2.5.先行研究の問題点

前原（2021）は、鹿児島市方言の疑問文音調として容認できる音調はどちらかといった観点で、基本的に上昇か下降の2択をインフォーマントに求めていたが、共通語化が進んだ影響の考慮が不十分である。言い換えれば、若年層が使用する疑問文イントネーションに共通語パターンがどの程度観察されるかという点が欠けている。前原（2021）の調査における上昇は、鹿児島市方言の疑問文における上昇を指しており、標準語の疑問文における上昇イントネーションとは異なる。以下は標準語の上昇と鹿児島市方言の上昇のイントネーションの違いを示している。

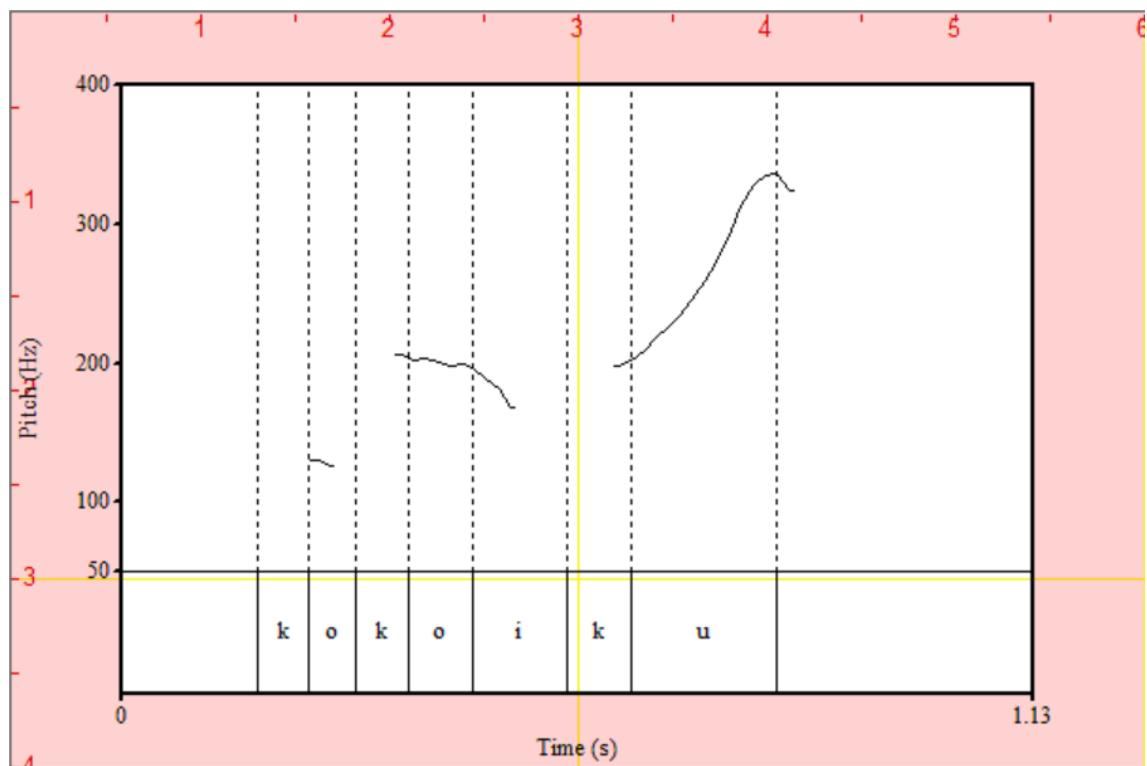


図 5:標準語疑問文（上昇）の「どこ行く？」

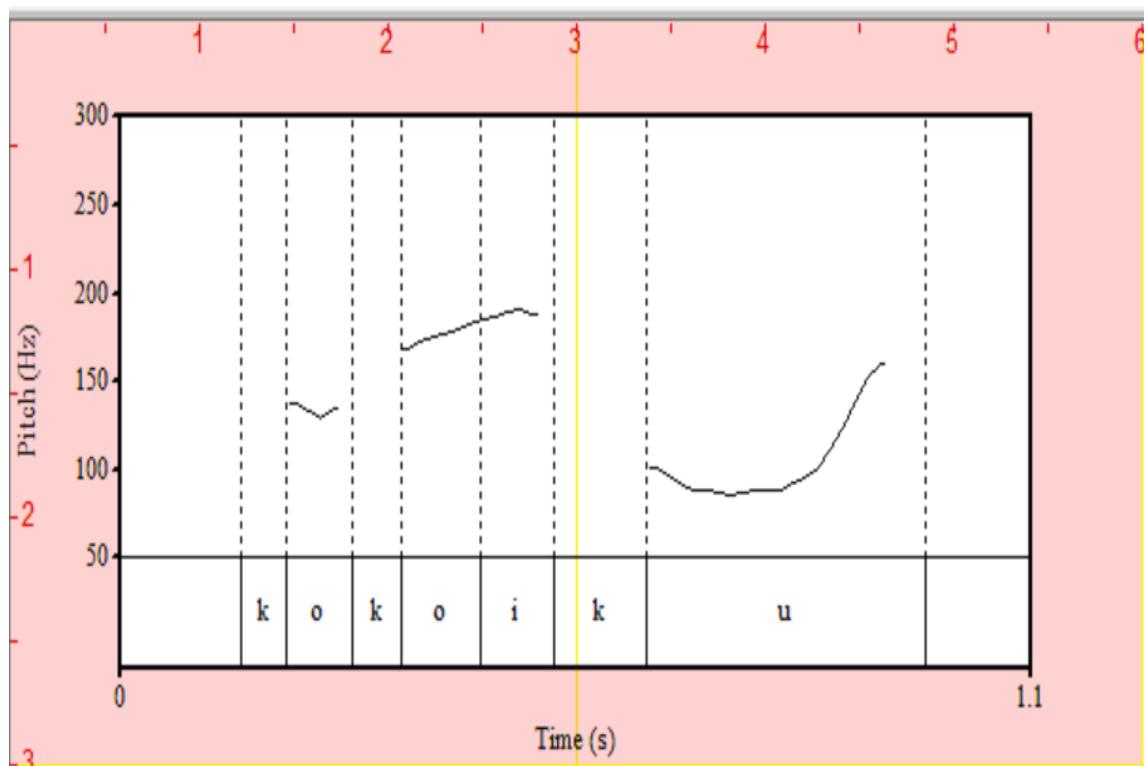


図 6:鹿児島市方言疑問文（上昇）の「どこ行く？」（A型動詞）

鹿児島市方言の上昇は上昇する直前に一度下降しているのが分かる。「行く」は鹿児島市方言ではA型動詞である。A型を「文節末から2番目の音節で上昇する」アクセントと見るならば、図で示した標準語の疑問文イントネーション同様に下がることなく上昇してよいはずである。しかし、平山（1997）が定義しているように、A型は「文節末から数えて2音節目が高く最終音節で下がる」型である。そのため、疑問文になども、上の図のように一度下がり、その後に平叙文と疑問文を区別するために上昇していると見ることが出来る。この点から、標準語の疑問文上昇と鹿児島市方言の上昇は性質を異にすると言える。

自然発話時であっても、イントネーションは前原（2021）の出した結論と一致するはずである。すなわち、A型動詞であれば真偽疑問文、疑問詞疑問文のどちらでも鹿児島市方言の上昇をとり、B型動詞では鹿児島市方言の下降（昇降調）をとるはずである。しかし、共通語化が進んでいる場合、インフォーマントによっては、鹿児島市方言の上昇、下降どちらであっても、使用することに違和感を覚えている可能性がある。そうしたインフォーマントは、A型動詞、B型動詞にかかわらず日常生活における会話では疑問文では標準語の上昇調をとるものと考えられる。前原（2021）の調査ではその点が考慮されておらず、太田（2002）の調査でも、予備調査に協力した女子学生一人が全ての文を共通語的音調で回答し、これを調査結果に含めていない。「このような話者がいることも今後の社会言語学的考察の際には一つの論点となるかもしれない」と述べるにどまっていた。そのため、先行研究で行われていた2択に加えて、標準語の上昇調を選択肢に入れることで、鹿児島出身の若年層が主として日常生活で使っているイントネーションが3つのイントネーションのうちどれであるかが過去の調査より正確に観察できる。標準語化の進行によって、特に外住歴が長いほど標準語上昇が動詞のアクセント型関係なしに鹿児島市方言の上昇と下降以上に多く選択される結果になると予想する。また、太田（2002）や前原（2021）が行った調査では、性別や外住歴の違いによってイントネーションに違いが出るかどうかについても検討が不十分だった。この点についても調査する。

### 3.調査

調査概要を以下に示す。

#### 3.1.調査概要

調査協力者:IM 氏（16歳女性）、SY 氏（16歳女性）、TJ 氏（20歳男性）、NK 氏（21歳女性）、HY 氏（22歳女性）、IT 氏（22歳女性）、KK 氏（22歳男性）、NS 氏（22歳男性）、SY 氏（22歳男性）、YM 氏（22歳女性）、GT 氏（23歳男性）、HK 氏（23歳男性）、KK 氏（23歳男性）、KS 氏（23歳男性）、NO 氏（23歳男性）、TK 氏（23歳男性） 計16名

調査方法:先行研究を基に作成した調査票を用いて、非対面調査を実施した。非対面調査は、HK 氏（23 歳男性）、TK 氏（23 歳男性）には調査票を用いて zoom で調査を行った。それ以外の 14 名については Google form <https://forms.gle/iVw2FvwVoFho9W5J6> を使用したアンケート調査を行った。調査に使用した例文、質問項目は zoom の調査と Google form で共通している。Google form では、1 つの例文（例えば真偽疑問 A 型「ここいく？」）について事前に録音した 3 種の音声、すなわち標準語上昇（JR）、鹿児島市方言の上昇（KR）、鹿児島市方言の下降（KF）をインフォーマントに聞いてもらい、どのイントネーションを自然発話時に使用しているかを選択式で回答してもらった。そのうえで、選択式の質問以外にも、最後に自由記述の欄を設け、各インフォーマントが回答中に鹿児島市方言と標準語の疑問音調の違いで気づいたことや疑問点等を記述してもらった。

音響分析 zoom の音声データから話者の発音部分を切り取り、Switch 音声ファイル変換ソフトで M4A から WAV へ形式を変換した。その後、praat を使用した分析を行った。

前原(2021)の調査方法に倣い、平山(1960)の動詞分類をもとに、A 型真偽疑問文、A 型疑問詞疑問文、B 型真偽疑問文、B 型疑問詞疑問文の調査例文リストを作成した。そのうえで、自然発話時の疑問文音調のイントネーションはどのように産出されるかの調査を行った。なお、前原(2021)とは調査に採用した語と例文が一部異なっている。

平山（1960）をもとに前原(2021)がまとめた分類を以下に記す。

#### A 型 2 音節動詞

行く、産む、売る、追う、置く、押す、貸す、刈る、聞く、汲む、消す、咲く、敷く、死ぬ、知る、吸う、空く、添う、散る、突く、継ぐ、積む、釣る、飛ぶ、泣く、鳴る、塗る、抜く、乗る、張る、引く、減る、巻く、増す、揉む、止む、遣る、言う、割る、着る、為る、煮る、寝る

#### A 型 3 音節動詞

上がる、遊ぶ、当たる、浮かぶ、歌う、送る、飾る、変わる、嫌う、削る、捜す、探る、沈む、慕う、進む、並ぶ、握る、運ぶ、巡る、譲る、明ける、植える、借りる、枯れる、消える、捨てる、染める、腫れる、負ける、燃える、乾く、違う、懷く

#### A 型 4 音節動詞

嘲る、窺う、疑う、悲しむ、従う、養う、与える、重ねる、並べる、始める、表わす

(原文ママ)

#### B型2音節動詞

会う、編む、打つ、書く、勝つ、噛む、切る、食う、蹴る、漕ぐ、刺す、住む、剃る、立つ、取る、縫う、脱ぐ、練る、飲む、這う、吐く、吹く、降る、乾す、掘る、蒔く、待つ、漏る、読む、来る、出る、見る

#### B型3音節動詞

余る、祈る、祝う、動く、移る、恨む、選ぶ、起こす、落とす、思う、帰る、崩す、碎く、曇る、縛る、叩く、頼む、作る、包む、詰まる、照らす、悩む、習う、憎む、濁る、僻む、光る、許す、生きる、起きる、落ちる、掛ける、覚める、建てる、付ける、溶ける、撫でる、逃げる、晴れる、歩く、隠す、はに入る (原文ママ)

#### B型4音節動詞

驚く、喜ぶ、集める、数える、調べる、助ける、流れる、離れる、隠れる

[前原(2021:7-8)]

平山（1960）の分類から A型動詞、B型動詞共に 10 個の動詞を選択し、HK 氏（23 歳男性）と TK 氏（23 歳男性）に発音してもらった。その結果、20 個全ての動詞が、平山（1960）が示したアクセント型と一致していた。

事前調査は本調査と同様の形式で HK 氏、TK 氏、NS 氏（22 歳男）、KK 氏（22 歳男）に行った。事前調査では A型、B型ともに 10 個の動詞を選択し、それぞれ真偽疑問文と疑問詞疑問文の 2 種類の例文、つまり合計 40 個の例文を作成して調査した。しかし、事前調査では目立って他の動詞と異なる結果になった動詞は無かつたため、条件が等しければ単語の違いはあまり問題にならないと考えた。また、事前調査で使用した単語の中には複数のインフォーマントが普段あまり使用しないと指摘したものが含まれていた。そこで、事前調査で使用した動詞や例文の中で、指摘を受けたものに加え、使用頻度が比較的低いと思われるものを省き、A型、B型ともに 6 個の動詞を調査に用いることにした。また、導入文脈や例文も事前調査から一部変更した。

以下は本調査で使用した例文と文脈である。

表3:調査に用いた例文と文脈 (A型真偽疑問文)

音節	アクセント型	語例	読み	文脈	真偽疑問文
2音節	A	行く	イク	ネットで評判の店を見つけて	ここ行く
	A	着る	キル	寒そうな相手に上着を渡し	これ着る
	A	乗る	ノル	駅前のタクシーを指さし	これ乗る
3音節	A	遊ぶ	アソブ	大きな広場を見つけて	ここで遊ぶ
	A	歌う	ウタウ	カラオケで曲名を指さし	これ歌う
	A	捨てる	ステル	穴の開いた靴下を見つけ	これ捨てる

表4:調査に用いた例文と文脈 (A型疑問詞疑問文)

音節	アクセント型	語例	読み	文脈	疑問詞疑問文
2音節	A	行く	イク	遊ぶ場所を相談しながら	どこ行く
	A	着る	キル	服屋で服を選びながら	どれ着る
	A	乗る	ノル	遊園地でアトラクションを見ながら	何乗る
3音節	A	遊ぶ	アソブ	遊ぶ予定を立てる時	いつ遊ぶ
	A	歌う	ウタウ	カラオケで選曲しながら	何歌う
	A	捨てる	ステル	たまっているゴミ袋を見て	いつ捨てる

表 5: 調査に用いた例文と文脈 (B 型真偽疑問文)

音節	アクセント型	語例	読み	文脈	真偽疑問文
2音節	B	飲む	ノム	手に持った飲み物を差し出し	これ飲む
	B	見る	ミル	テレビ番組表の番組名を指さし	これ見る
	B	来る	クル	翌日遊びたいと思って	明日来る
3音節	B	帰る	カエル	辺りが暗くなってきて	もう帰る
	B	頼む	タノム	飲食店でメニューを指さして	これ頼む
	B	作る	ツクル	料理のレシピを見ながら	これ作る

表 6: 調査に用いた例文と文脈 (B 型疑問詞疑問文)

音節	アクセント型	語例	読み	文脈	疑問詞疑問文
2音節	B	飲む	ノム	ドリンクメニューを見ながら	何飲む
	B	見る	ミル	上映中の映画作品を調べて	何見る
	B	来る	クル	相手の予定が知りたくて	いつ来る
3音節	B	帰る	カエル	外出中の家族に連絡をして	いつ帰る
	B	頼む	タノム	飲食店で一緒にメニューを見ながら	何頼む
	B	作る	ツクル	料理しようとしている親に 対して	何作る

### 3.2.調査結果

インフォーマントに自然発話時のイントネーションを標準語の上昇、鹿児島市方言の上昇、鹿児島方言の下降（昇降調）の3つの中から選択してもらった。以下がA型の真偽疑問文、疑問詞疑問文についての調査結果をインフォーマントごとにまとめた表である。

なお、表中では標準語の上昇をJR、鹿児島市方言の上昇をKR、鹿児島市方言の下降をKFと表記している。大学4年生は外住歴を一律3.5年とした。表において、JRを赤色、KRを黄色、KFを緑色で色分けしており、インフォーマントは左上から順に外住歴順に並べている。表中では、真偽疑問文と疑問詞疑問文をそれぞれY/N、WHとした。

表7:インフォーマントへの調査結果（A型動詞）

疑問文の種類	インフォーマント 外住歴（年）	GT 0	SY 0	IT 0	SY 0	HK 0	YM 0	TJ 0	KS 1		3.5
A	Y/N ここ行く	JR	KR	JR	KR	KR	JR	JR	KR		
	これ着る	JR	KR	JR	KR	KR	JR	JR	KR		
	これ乗る	JR	KR	KR	KR	KR	JR	JR	KR		
	ここで遊ぶ	JR	KR	JR	KR	JR	JR	JR	KR		
	これ歌う	KR	KR	JR	JR	KR	JR	KR	JR		
	これ捨てる	JR	KR	JR	KR	JR	JR	JR	JR		
	WH どこ行く	JR	KR	JR	KR	JR	KR	JR	KR		
	何着る	JR	KR	KR	KR	JR	KR	KR	JR		
	何乗る	JR	KR								
	いつ遊ぶ	JR	KR	JR	KR	KR	KR	JR	JR		
	何歌う	KR									
	いつ捨てる	JR	KR	KR	KR	JR	KR	KR	JR		
疑問文の種類	インフォーマント 外住歴（年）	HY	NO	KK	TK	NK	NS	KK	IM		
		3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	4		5
A	Y/N ここ行く	JR	JR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	これ着る	JR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	これ乗る	JR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	ここで遊ぶ	KR	JR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	これ歌う	KR	KF	JR	JR	JR	JR	KF	JR		
	これ捨てる	KR	KR	KR	JR	JR	JR	KR	JR		
	WH どこ行く	KR	KF	JR	JR	JR	JR	KR	KR		
	何着る	KR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	何乗る	KR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	いつ遊ぶ	JR	KR	JR	JR	JR	JR	JR	JR		
	何歌う	KR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	いつ捨てる	KR	KR	JR	JR	JR	JR	JR	JR		

調査の結果、A型真偽疑問文について下降はほぼ見られず、JRかKRのどちらかが選択されているのが大半であり、SY氏（外住歴0年）は自然発話時に全てKRが選択されていた。NO氏とKK氏の2人のみA型でKFを選択しており、NO氏は真偽疑問文、疑問詞疑問文の両方でKFが観察された。TK氏、NK氏、NS氏は真偽疑問文、疑問詞疑問文にかかわらず全てJRだった。全体的に真偽疑問文、疑問詞疑問文で選択されるイントネーションに大きな違いはなかったものの、YM氏のみが真偽疑問文は全てJR、疑問詞疑問文は全てKRときっぱり分かれていた。

B型動詞に関しても、A型動詞と同様の形式で質問をおこなった。以下がその結果を示した表である。

表8:インフォーマントへの調査結果（B型動詞）

疑問文の種類	インフォーマント 外住歴（年）	GT 0	SY 0	IT 0	SY 0	HK 0	YM 0	TJ 0	KS 1		3.5
Y/N	これ飲む	JR	KF	KR	KF	JR	JR	JR	JR		
	これ見る	JR	KR	KR	KR	JR	JR	JR	JR		
	明日来る	JR	KR	KR	KR	JR	KF	JR	KR		
	もう帰る	JR	KR	KR	JR	KF	JR	KR	KR		
	これ頼む	JR	KR	JR	KR	JR	JR	JR	JR		
	これ作る	KR	KR	KR	JR	JR	JR	KR	KR		
WH	何飲む	JR	KR	JR	KR	JR	KR	JR	KR		
	何見る	KR	KR	KR	KR	JR	KR	JR	JR		
	いつ来る	KR	KR	KR	KR	JR	KR	JR	JR		
	いつ帰る	KR	KR	JR	KR	KF	KR	JR	JR		
	何頼む	JR	KR	JR	KR	KF	KR	KR	KR		
	何作る	KR	KR	KR	KR	JR	KR	JR	KR		
B	疑問文の種類	HY	NO	KK	TK	NK	NS	KK	IM		
	外住歴（年）	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	3.5	4		5
	これ飲む	KF	JR	JR	JR	JR	JR	KF	JR		
	これ見る	KR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	明日来る	KF	JR	JR	JR	JR	JR	KF	JR		
	もう帰る	JR	KR	JR	JR	JR	JR	KF	JR		
	これ頼む	KR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	これ作る	KR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	何飲む	KR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	何見る	KR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	いつ来る	KR	JR								
	いつ帰る	KR	KR	JR	JR	JR	JR	JR	JR		
	何頼む	KR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		
	何作る	KR	KR	JR	JR	JR	JR	KR	JR		

A型動詞と比較すると自然発話時にKFを使用するという回答が少しだけ増加したが、前原（2021）の結果から想定したよりも選択されなかった。多くのインフォーマントは、

A型とB型で選択するイントネーションに大きな違いは見られなかった。特にTK氏とNK氏、NS氏については、A型動詞の時と回答は全く同じで、真偽疑問文、疑問詞疑問文のどちらでも全ての動詞でJRを自然発話時にとると回答した。A型動詞でJRを多く選択したインフォーマントはB型動詞でもJRを多く選択し、A型動詞でKRを選択したインフォーマントはB型動詞でもKRを多く選択している傾向にあることが見てとれた。しかし、HK氏のみその傾向からは外れていた。

zoomで調査を行ったHK氏は、A型動詞ではKRを多く選択している一方で、B型動詞はKRではなくJRを多く選択し、A型では見られなかったKFを選択していた。HK氏は、KFと回答した単語の中でも「もう帰る」のみ以下のように上昇も使用することがあると回答した。上昇調ではあるものの、JRや調査に使用したKRの音声とも違い、直前に下降してから最後に上昇するまでのピッチが大きくは変化しなかった。

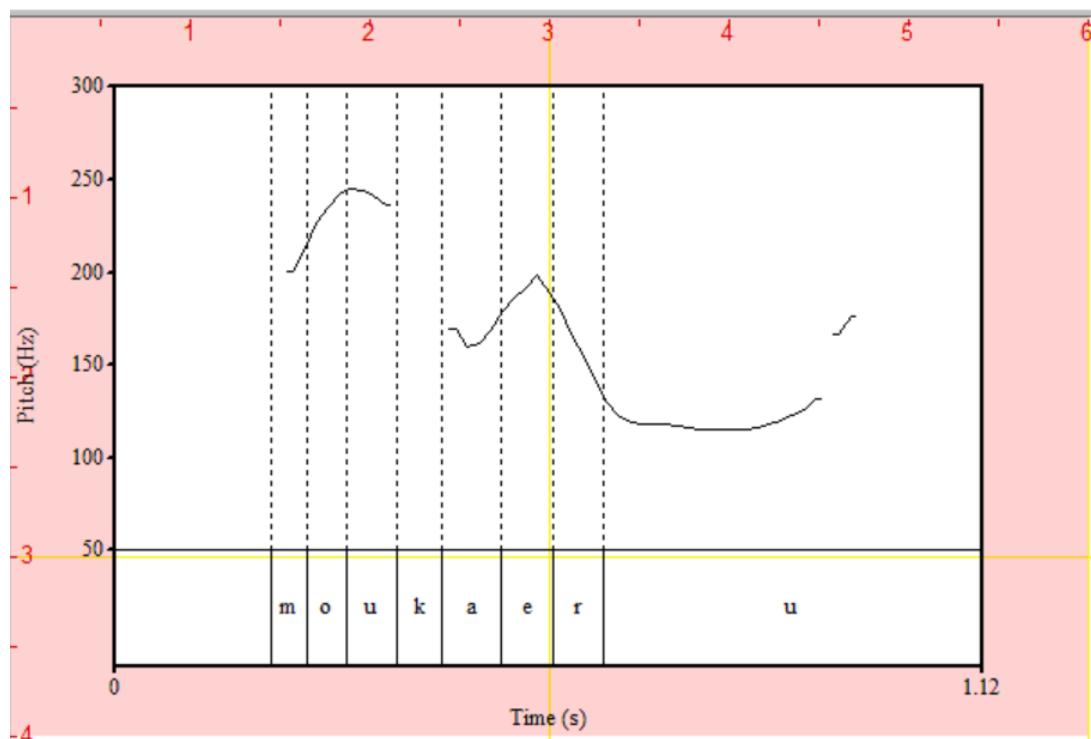


図7:HK氏が発音した上昇調の「もう帰る？」

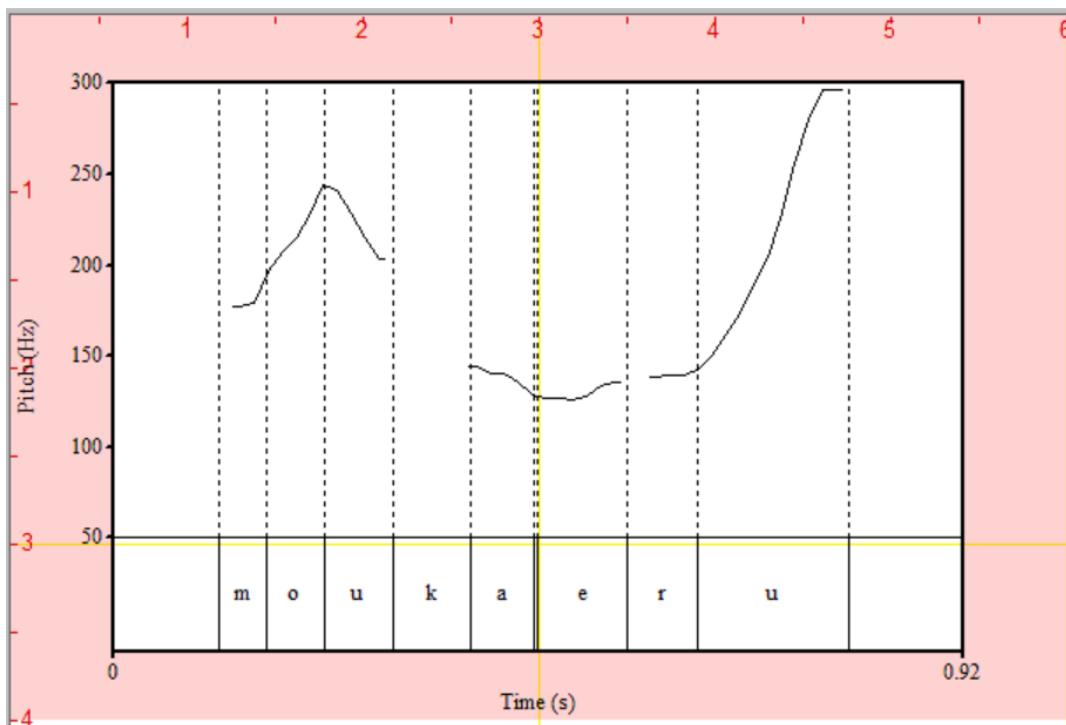


図 8:調査に使用した KR の「もう帰る？」

この上昇調は、A型、B型全ての動詞・例文の中で「もう帰る」でのみ確認された。

個々のインフォーマントの結果に焦点を当てると、外住歴がなくとも自然発話時には JR が基本であったり、外住歴が長くとも自然発話時には KR の選択率が高かったりと一見法則性や傾向がはつきりしない。そこで、外住歴の長さで分けて傾向を探った。外住歴の長さで大きく 2つのグループに分け、JR、KR、KF の選択率を求めた。外住歴 1 年の TJ 氏までを外住歴の短いグループ、3 年以上を外住歴の長いグループとした。

表 9:外住歴 0~1 年のインフォーマントの A 型動詞におけるイントネーション選択率

イントネーション	JR	KR	KF
選択率 (%)	41.7	58.3	0

表 10:外住歴 3 年以上のインフォーマントの A 型動詞におけるイントネーション選択率

イントネーション	JR	KR	KF
選択率 (%)	65.7	31.5	2.8

外住歴が比較的長いグループの方が、より共通語化が進んでいる影響からか JR の選択率が高くなっていることが読み取れる。また、外住歴の長いグループでのみ、少數ながら、前原（2021）の調査において、A 型動詞には出ていなかった KF が観察されている。これについては、外住歴が要因かどうかは明らかではなく、今後の課題として検討を重ねたい。

以下同様に B 型動詞についてもイントネーション選択率を外住歴でグループ分けして表にまとめた。

表 11: 外住歴 0~1 年のインフォーマントの B 型動詞におけるイントネーション選択率

イントネーション	JR	KR	KF
選択率 (%)	42.9	50	7.1

表 12: 外住歴 3 年以上のインフォーマントの B 型動詞におけるイントネーション選択率

イントネーション	JR	KR	KF
選択率 (%)	67	28.7	4.6

表を見てみると、どちらのグループも、KF の選択率が A 型より増加してはいるものの、A 型動詞の時のイントネーション選択率と大きくは変化しなかった。外住歴に関係なく、A 型動詞の方が KR の選択率が少し高くなっている。前原（2021）によると、A 型動詞では、真偽疑問文/疑問詞疑問文にかかわらずイントネーションは上昇で区別され、平叙と疑問の区別がされる。そのため、自然発話の際にも A 型動詞では KR が選択されることが B 型動詞と比較して多くなっているのではないかと推測する。前原（2021）の調査との大きな違いは、自然発話時には、B 型動詞においても KR が KF 以上に選択されうるという点である。A 型動詞でも、B 型動詞でも、自然発話時には JR が高くなる点は予想可能だった。しかし、B 型動詞であれば KF が一定程度見られておかしくないはずである。実際には、A 型動詞の時よりわずかに選択率は上がったものの、外住歴の長さにかかわらず KR より選択率が低く、どちらも 10% 以下であった。

更に、同様の形式で性別ごとに分けて以下の表を作成した。

表 13: 男性インフォーマントの A 型動詞におけるイントネーション選択率

イントネーション	JR	KR	KF
選択率 (%)	55.8	41.7	2.5

表 14: 女性インフォーマントの A 型動詞におけるイントネーション選択率

イントネーション	JR	KR	KF
選択率 (%)	54.2	45.8	0

男女間で全てのイントネーション選択率がほぼ一致し、大きな差が見られなかった。次に B 型動詞での男女インフォーマントそれぞれの選択率を見ていく。

表 15: 男性インフォーマントの B 型動詞におけるイントネーション選択率

イントネーション	JR	KR	KF
選択率 (%)	61.7	32.5	5.8

表 16: 女性インフォーマントの B 型動詞におけるイントネーション選択率

イントネーション	JR	KR	KF
選択率 (%)	47.2	47.2	5.6

B 型動詞では、女性インフォーマントは JR と KR の選択率が一致した。また、A 型動詞と比較すると JR の選択率で男女間に少々差があった。しかし、これらの表を見たうえで性別の違いがイントネーションの選択率にはっきりとした違いをもたらすとは結論付けられそうにはなかった。

結果について、動詞のアクセント型関係なしに JR の選択率が高くなると考えていたが、その点は推測通りだった。外住歴が長いほど JR を選択する傾向にあることも想定内であった。しかし、前原（2021）の結果から JR に次いで A 型では KR、B 型では KF

が多く選択されると見ていたが、予想に反し、アクセント型関係なしに KF はほとんど選択されていなかった。性別の違いによる大きな差は無かった。

### 3.3.自由記述

Google form では以下のような自由記述欄を設けた。図内の説明に書かれている 1, 2, 3 がそれぞれ JR、KR、KF を指す。

自由記述

説明 (省略可)

ここまで質問で気付いたことがあれば何でも書いてください。  
(例: 基本的に1番目を選択したが、2番目も○○な場合は違和感なく使える。  
3番目は○○なシチュエーションでしか使わない印象。  
自分は1だが3は高齢者が使う鹿児島市方言に感じる  
など)

長文回答

図 9:Google form 調査の自由記述欄

若年層では特に共通語化が進んでいることから、アクセント型に関係なく自然発話時には JR が多数を占め、その関係で KF はあまり使用されなくなってきたのではないかと推測することはできた。ところが、KF についてはインフォーマントによって意見が分かれていることが自由記述の欄で判明した。

KS 氏 (23 歳男性) は自然発話時には JR または KR を使用している。KR を一般的な鹿児島市方言だと感じており、下降調=KF はアクセント型に関係なく、自然発話時に使用することも、鹿児島市方言としても違和感があると記述していた。反対に、IM 氏 (16 歳女性) は、自然発話時に本人は使用しないものの下降調は鹿児島市方言らしく感じられるとしており、KR にはそこまで鹿児島市方言という印象が無いようだった。また、NK 氏 (21 歳女性) も自然発話時にはアクセント型関係なく JR を使用するが、鹿児島市方言としては前原 (2021) の調査結果通り A 型動詞で KR、B 型動詞では KF が容認可能であるとしていた。GT 氏 (23 歳男性) は、KF は自然発話時には一切使用しないものの、鹿児島市方言としては容認可能であり、JR、KR に比べると全体的に否定的、ネガティブなニュアンスが含まれるとした。対照的に NS 氏 (22 歳男性) と KK 氏 (22 歳男性)、NS 氏 (21 歳女性) は、KR に否定的、懐疑的ニュアンスが含まれると回答した。KK 氏 (22 歳男性) は、主に子どもや親戚相手の時限定であれば、KF も自然発話時に使用可能であるとも述べた。

これらの意見から、例文の場面設定次第では、自然発話時にとられるイントネーショ

ンが今回の調査結果とは少なからず変わる可能性があるとみている。

また、zoom での調査を行った HK 氏については、JR と KR の区別を自然発話時における意識していないようであった。本人は自然発話時にはすべて標準語のつもりで話しているようだったが、発音してもらった際に JR と KR が入り混じった結果になり、KR を鹿児島市方言のイントネーションだと認識できていないようにも見受けられた。HK 氏は外住歴がないため、自分が普段用いているイントネーションがどういったものか、どう使い分けているか内省する機会に乏しいことが要因だと考えられる。そのためか、HK 氏からは、普段の会話で方言であることを他者から指摘されることが無く、自分の話している言葉が標準語か鹿児島市方言か意識する機会が全く無いため、改めて単語ごとにアクセントを聞かれると答えるのが難しいという意見が出た。HK 氏自身は B 型の真偽疑問文でのみ KF を選択した。KF と答えた単語については、KF と同程度の頻度で自然発話時に JR も出ることがあると回答した。それらの単語で、どういった場合に JR と KF を使い分けているかには自覚的ではなかった。加えて、自然発話時に出すかどうかは別として、KF を動詞のアクセント型にかかわらず鹿児島市方言として容認可能だと認識しているようだった。

#### 4. 考察

前原（2021）の調査では JR が選択肢に存在せず、KR と KF のどちらが鹿児島市方言として容認可能かといった調査だったが、今回の調査結果では前原（2021）の調査結果とは異なり、外住歴の長さに関係なく、A 型動詞はもちろん、B 型動詞でも KF はあまり選択されない傾向が見られている。昇降調は、木部（2000）や太田（2002）の時点では、若年層の間に広がった比較的新しい第 3 の音調であった。しかし、今回の調査から、昇降調は自然発話時に使用される頻度が非常に少ないだけでなく、鹿児島市方言としても違和感を抱く人がいることが分かった。今回はインフォーマントを若年層に限定しているが、当時昇降調を主に使っていた世代が中高年層になり、世代が入れ替わったことが原因の一つと考えられる。加えて、共通語化が進んだことで JR の使用頻度が増加し、同じく上昇をとる KR も増加する一方で、KF を JR や KR との類推から上昇調にすることで疑問文のイントネーションを上昇で統一する体系の変化が生じたと推察される。KF にのみ焦点を当てるのであれば、昇降調が広がりを見せた当時の若年層、つまり現在の中高年層を中心に自然発話時のイントネーションを調査する必要がある。そうすることによって、世代による KF の使用頻度の変化が明らかになるだろう。実際に、前原（2021）の調査では、B 型疑問詞疑問文で若年層のインフォーマントは上昇と回答する一方、中高年層のインフォーマントが上昇と昇降はどちらでも容認可能とした上で、昇降のほうが自然に感じるとしていた。

調査開始の段階では外住歴が短い人ほど自然発話時に A 型動詞では KR の選択率が

増加し、B型動詞では KF の選択率が増加する一方で、外住歴の長い人ほど自然発話時に動詞のアクセント型に関係なく JR を使用するのではないかと予測を立てていた。グループ分けをすると外住歴が長いグループほど JR の選択率は高くなる。しかし、一人一人のデータを見ると外住歴が 1 年未満のインフォーマントの中でも、JR をほとんど使用しないもの、JR と KR を同程度選択するもの、A 型動詞では自然発話時に主に KR を使用する一方で B 型動詞では JR を主に使用しているものなど、インフォーマントごとで意見が分かれて多様化している、換言すると個人差が大きいことがうかがえた。また、外住歴が 3 年以上でも自然発話時に JR を中心に使うインフォーマントと KR を中心に使うインフォーマントの 2 つに分かれた。これらを踏まえると自然発話時に JR と KR のどちらをとるかという点において、外住歴の長さはあくまでイントネーション選択率に影響を与える要因の一つであり、より詳細に要因を探っていくのであれば、親の言語変種等も調査項目に入れる必要が出てくる。また、鹿児島県外に長く住む人でも、所属するコミュニティに鹿児島出身者が他にいる場合、KR が選択されることが多いといったこともあるかもしれない。以上から、今回の調査で判明した事実として以下を示す。

鹿児島市方言話者の若年層の間では、自然発話時に選択される疑問文イントネーションと、鹿児島市方言として容認可能と認識されるイントネーションには乖離がある。外住歴や性別にかかわらず若年層では KF が自然発話時に選択されることは稀である。

今回の調査は疑問文イントネーションに限定したものではあったが、特に共通語化が進む若年層では疑問文に限らず同様の結果が得られることがあると推察される。

## 5. 結論と今後の課題

今回の調査において、鹿児島市方言話者の若年層の間では、自然発話時に選択される疑問文イントネーションと、鹿児島市方言として容認可能と認識されるイントネーションには乖離があることが明らかとなった。鹿児島市方言話者の若年層は、動詞のアクセント型にかかわらず自然発話時には疑問文のイントネーションに JR もしくは KR を選択する傾向にあることも判明した。また、外住歴の長いインフォーマントのグループほど JR を選択する割合が高かった。性別による選択率の大きな差は見られなかった。どのインフォーマントにも、A 型動詞だけでなく、B 型動詞でも自然発話時に KF はあまり選択されない傾向が見られている。

課題の一つはインフォーマント数の確保である。今回のインフォーマント 16 名のうち 6 名が外住歴 1 年未満だが、その中でも JR と KR どちらを主にとるか分かれている。

JR と KR について更にはつきりとした傾向を見出すには、外住歴がないインフォーマントは勿論、外住歴が複数年のインフォーマントも含めて全体としてインフォーマントを増やす必要がある。今回は集まったインフォーマントの外住歴を見たうえで、外住歴 0~1 年と 3 年以上の大まかなくくりで 2 つのグループに分類した。インフォーマントを増やし、外住歴 0~1 年、1 年~2 年など外住歴ごとに今回以上に細かく分類していく、具体的な年数ごとの傾向を示すことで、イントネーション選択の背景にある時間的要因がより明確になると考えられる。また、今回の調査は若年層中心に行ったものの、20 代前半のインフォーマントが多く、10 代のデータが乏しかった。同じ若年層という括りでも、15~16 歳や 23~24 歳ではイントネーションに違う傾向がみられてもおかしくないため、今後は若年層に限定した調査を行う場合、10 代のインフォーマントの数を増やしていくことが必須だ。

特に Google form で回答したインフォーマントについては、事前に筆者が録音していた音声データのアクセント、イントネーションの正確性に少なからず問題があり、影響された可能性を否定することが出来ない。Google form での回答を依頼する場合、音声データのイントネーションの正確性を確保するためには、複数の鹿児島市方言話者による録音データを使用することや鹿児島市方言話者による音声データのイントネーションチェックを行うこと等も考慮すべきだろう。

問い合わせの立て方にも課題が残った。今回の調査で設問には「日常会話であなたがついているイントネーション」と断りを入れたうえで選択してもらったものの、インフォーマントによってはイントネーション選択時に「自然な発話」と「鹿児島市方言らしさ」を混同している可能性があったため、より詳細な説明や、設問ごとに選択理由を追加で記述してもらう形式を導入することも検討が必要である。加えて、鹿児島に住んでいても、フォーマルな場では共通語のイントネーションが好まれ、親しい間柄では鹿児島市方言のイントネーションが復活するケースも考えられるなど、自然発話時にとられるイントネーションが今回の調査結果とは少なからず変わる可能性があるため、一つの単語につき導入文脈を複数用意することも一つの手だろう。文脈に応じたイントネーション選択のパターンを明確にすることで、鹿児島市方言の話者におけるイントネーション選択の多様性を更に解明することになる。外住歴が無い HK 氏のように内省が困難な場合がありうるため、より正確なイントネーション算出には複数名の鹿児島市方言話者の自然な会話を録音することも重要だ。

最後の課題は、文末詞あり文の設問を用意することだ。先行研究より、ターゲットとする若年層では文末詞がほとんど用いられていないことや、疑問文末詞を付与してもアクセント型に影響しないことが分かっていた。このことから、今回は文末詞ありの疑問文については質問をしなかった。しかし、鹿児島市方言として容認可能かといった観点では影響がなくとも、自然発話時にとるイントネーションの観点では、文末詞ありで発音した場合、文末詞なしの時と違う結果が産出されるといった可能性を考慮できていな

かった。この点は敢えて文末詞あり文で発音したときのイントネーションを聞いて更なる調査を行いたい。

## 参照文献

- 太田一郎 (2002) 「鹿児島方言の疑問文音調について-動詞述語文のアクセントと韻律の関係 -」 『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』 56:25-43.
- 上村孝二 (1983) 「九州方言の概説」 飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一(編) 『九州地方の方言』 302.東京：国書刊行会.
- 上野善道 (2012) 「N型アクセントとは何か」 『音声研究』 16:44-62.
- 木部暢子・久見木大介 (1993) 「鹿児島市方言の質問のイントネーションについて」 『鹿児島大学法文学部紀要人文学科論集』 38:19-34.
- 木部暢子(2000) 『九州二型アクセントの研究』 東京：勉誠出版.
- 窪薙晴夫 (2021) 『一般言語学から見た日本語のプロソディー 鹿児島方言を中心に』 東京：くろしお出版
- 後藤和彦(1994) 『鹿児島方言の語法研究』 私家版.
- 平山輝男(1960) 『全国アクセント辞典』 東京：東京堂出版.
- 平山輝男(1997) 『鹿児島県のことば』 東京：明治書院.
- 前原千紗(2021) 「鹿児島県鹿児島市方言における疑問文音調のイントネーション」 卒業論文，九州大学.

## 謝辞

本論文の作成にあたり、大変多くの方々にお世話になりました。心より感謝申し上げます。

指導教官である下地理則先生には、日頃から授業や面談で大変お世話になり、言語学についての多くの知識や方言調査の方法をご指導いただきました。研究テーマの決定から執筆に至るまで多大なる助言をいただいたことで、本論文を完成させることができました。

研究室の先生方である、上山あゆみ先生、太田真理先生には、講義や演習を通して言語学の様々な基礎知識を教えていただきました。

鹿児島県の方言調査を行うにあたり、調査に協力してくださった話者の方々に心からお礼申し上げます。負担の大きい調査であるにもかかわらず、時間をつくって回答したり、自身の人脈を使って鹿児島県出身の方々に連絡を取ってくださったりした方々に深く感謝します。

言語学・応用言語学の先輩方は、幾度もご助言をいただきました。特に、廣澤尚之先輩は、お忙しい中論文の相談に乗ってくださり、適切な表現や文章構成、praat の使用方法等をご教示いただきました。

また、言語学・応用言語学研究室の同期とは、論文の進捗を語り合いながら、励まし合って論文完成まで努力することが出来ました。

最後に、私をここまで見守り育て、大学生活を支えてくださった両親に感謝申し上げます。